

## 大学教養教育における文章表現指導の実際 ——2003年度1期「文学VI」の場合——

田中 宏幸

### 1 はじめに

近年、大学教養教育における文章表現指導の重要性が指摘されるようになった。講義用テキストも数多く出版され、講義内容も公開されるようになってきた。最近出版されたもので、私の手元にあるものだけでも、中西一弘編『基礎文章表現法』（朝倉書店、1996）、加藤典洋『言語表現法講義』（岩波書店、1996）、松谷英明『理工系学生のためのトレーニング・テキスト レポート・論文作成入門』（ほんの森出版、1998）、長沼行太郎『思考のための文章読本』（ちくま新書、1998）、金子昭雄他『現代文章講座』（世織書房、1999）、中村明他編『テキスト日本語表現』（明治書院、1999）、倉島保美『書く技術・伝える技術』（あさ出版、1999）、荒木晶子他『自己表現力の教室』（情報出版センター出版局、2000）、梅田卓夫『文章表現四〇〇字からのレッスン』（ちくま学芸文庫、2001）、伊丹敬之『創造的論文の書き方』（有斐閣、2001）など、枚挙にいとまがない。これらのテキストには著者の個性があふれており、学ぶところも多い。だが、学習者が異なり、ねらいが異なる以上、そのまま自教室で使うというわけにはいかない。

私自身は、1995年にノートルダム清心女子大学に転じて以来、教養科目としての文章表現法を担当し、多くの実践例に学びつつ、毎年その内容に改良を加えてきた。この9年間を振り返ると、まだまだ不十分なところが目につくが、やっと一つのスタイルが出来上がってきたように思う。2004年度は国内研修のため、講義が1年間中断することになるので、この機会に、1996年度の実践（『ノートルダム清心女子大学紀要 国語国文学編』第21巻第1号、1997年3月）と比較しつつ、2003年度前期の実践について報告し、テキスト作りへの一歩としたい。

### 2. 1996年度の講義内容と反省

1996年度1期（4月～7月／受講生29名）は、12回開講した。そのねらいと内容は、以下のとおりである。テキストには、中西一弘編『基礎文章表現法』（前掲）を用いた。

#### (1) 講義のねらいと指導上の留意点

##### ○ねらい

- ①実用性・伝達性を重視し、「達意の文」の書き方を身につけさせる。

- ②典型的な文章表現の型を理解させ、それを自己表現に活用する力を身につけさせる。
- ③毎時間の表現活動を記録させ、文書整理術を身につけさせる。

### ○留意点

- ①書き慣れる機会を増やし、文章表現に対する抵抗感を軽減する。
- ②知的好奇心を刺激する課題を設定して、表現意欲を喚起する。
- ③文章表現過程に沿った課題に実際に取り組みせ、毎時間達成感が得られるようにする。
- ④提出物は早期に返却する。また、相互評価を取り入れ、表現意欲を持続させる。

### (2) 各講義の内容

各授業の学習内容と課題を一覧にして示すと、下表のようになる。

講	学習内容と課題
1	四字熟語による自己紹介文を書く。
2	手紙の形式を習得する。(転居の挨拶状)
3	恋文にお断りの返事を書く。(「芥川龍之介の恋文」への返信)
4	言葉を定義する文を書く。(ピアズ『悪魔の辞典』にならって)
5	範文の文章構成法と表現技法を分析する。(伊丹十三「目玉焼の正しい食べ方」)
6	範文の「枠組み」を活用して随筆を書く。(「〇〇の正しい△△仕方」)
7	小論文を書くために「取材」する。(テーマ「夫婦別姓は認めるべきか」または「赤ちゃんを連れて外出するときはおんぶかだっこか」)
8	小論文の「構想」を練る。(テーマは第7講からの継続)
9	「達意の文」を書く方法を知る。(「読点のうち方と修飾の順序、構文の乱れ」)
10	小論文を書く。(テーマは第7講からの継続)
11	図形を言葉だけで説明する文章を書く。(全体像から述べ始める文章構成法)
12	理由を伴った文章を書く。(「あなたにとって『国語表現論Ⅲ』の授業はどういうものであったか、具体的理由を添えて意見を述べよ。」)
*	「私の本」の編集・作成(自宅学習)

### (3) 反省

この年度は、読み手にとってわかりやすい文章が書けるようになることと、多彩な表現方法を体験することとに重点をおいたカリキュラムを組んだ。また、授業の展開にあたっては、迅速な作品の返却を心がけるなど、常に対話を心がけた。さらに、相互評価を取り入れたり、学習記録を作成させたりしたことによって、受講生たちは達成感の得られる授業として、高く評価してくれた。

しかし、指導者としては、基礎から積み上げていくという系統性において、未熟さを実感した講義であった。

### 3. 2003年度の指導計画と授業の実際

## (1) 学習指導の概要

2003年度第1期は、15回（30時間）開講した。授業科目名は、教務システムの変更に伴い、この年度より「文学Ⅵ」に変更されている。受講生は57名（人間生活学部児童学科1年生39名、2年生3名、4年生7名、同学部人間生活学科4年生2名、同学部食品栄養学科4年生1名、文学部英語英文学科3年生2名、4年生3名）である。

この年度は、テキストとして、速水博司『大学生のための文章表現入門』（蒼丘書林、2002）を用いることにした。この本は、「Ⅰ 文章入門」「Ⅱ 文章作成の基本」「Ⅲ さまざまな文章を作成する」「Ⅳ 資料」の四部で構成されている。その内容においても、コンポジション理論をベースにした文章作成手順と、各文種ごとの作成目的や作成要領がわかりやすく解説されている上に、適度に練習問題や演習問題が添えられており、学生になじみやすいものとなっている。このテキストを活用することによって、私の実践課題である系統性に新たな道筋を見出すことができそうだと判断したのである。

まず、授業概要を示そう。一覧にすると下表のようになる。

講	単元名	学習内容（課題内容） 注：英数字は作品紹介日との対応
1	授業開き（出会いを創る）	エントリーシートを書く（学習歴と学習目標）
2	文章入門（文章を書く手順）	自己PR文を書く（話題の選択と頭括型の構成） A①
3	文章交流会A／主題を選ぶ	主題文を書く（主題を一文で表す）
4	材料を集める／作品紹介①	描写文を書く（季節の変化を三つの具体的事実で描写） ②
5	構成を考える／作品紹介②	議論文を書く（論題：「真面目」は長所だ） ③
6	段落分けと推敲	修飾語の位置と読点の付け方（練習問題）
7	レポートを書く／作品紹介③	レポートの書き方（事実と意見の区別／引用の方法）
8	手紙を書く（1）	手紙の書き方（手紙の形式と構成）
9	手紙を書く（2）	手紙を書く（芥川龍之介の恋文への返信を書く） ④
10	説明文を書く	「折り鶴」「ポートボール」「携帯電話」を説明する B
11	報道文を書く／作品紹介④	物語『あらしの夜に』を材料に報道文を書く ⑤
12	エッセイを書く／文章交流会B	エッセイ「私の流儀」を書く（主張と容認の構成） ⑥
13	効果的な見出し／作品紹介⑤	キャッチコピーの技法と効果
14	敬語・慣用表現／作品紹介⑥	敬語・慣用表現の学習（練習問題）
15	期末試験／授業評価	文章の批正／懇談会案内状の作成／用語の説明
*	「私の本」の編集・作成	目次の作成／編集後記の作成（自宅学習）

## (2) 各授業の実際

### 《第1講》授業開き

「授業開き」の課題は、エントリーシートの記入（授業終了時に提出）である。担当者の自己紹介と授業内容の概説を行なった後、次の5項目について答えてもらった。受講生の実態を知るとともに、彼女らの受講姿勢を確かなものとするためである。——①受講動

機は何か、②文章表現で困っていることは何か、③どんな文章が書けるようになりたいか、④文章を書いてよかったと思った体験、⑤中学・高校で受けた文章表現指導。

また、次時の学習に向け、効果的な自己PR文の在り方について講義した。教材は、ラジオ講座テキスト『NHKアナウンサーの話す・聞く・読む』（2003.4）から自己PR文の三例を引用して作成した。三例を比較検討し、ポイントとして確認したことは、①話題を絞ること、②主張・結論など重要事から書き始めること（頭括型の文章構成）、である。

### 《第2講》文章入門／文章を書く手順を理解する

第2講は、テキスト「Ⅰ 文章入門」にしたがって、「文章を書く手順」を理解する時間である。エントリーシートの回答内容から、中学・高校ではほとんど文章表現指導を受けていないと推察されたので、まず全体像を理解させたかったのである。主な講義内容は次のとおり。——①語と文と文章との違い、②文章の機能、③文章の種類と目的、④文章を書く手順（主題を選ぶ→材料を集める→構成を考える→下書きをする→推敲する→清書する）、⑤IT時代の文章作法、⑥文章評価の観点。

なお、「自己PR文」（400字）の記述は、自宅学習課題とした。

### 《第3講》文章交流会／主題文を書く／主題を選ぶ

第3講の前半は、文章交流会である。各自の「自己PR文」を回覧し、3名からコメントをもらうのである。コメントの観点は次の二つ。——観点①心惹かれたところ。②もう少し詳しく述べてほしいと思ったところ。

なお、「自己PR文」は、コメントを読んだ感想を書き加えさせて提出させた。

後半は、テキスト「Ⅱ 文章作成の基本」に則って、主題を文形式に表す課題である。提示されたテーマについて、自分の考えをそれぞれ一文で書き、さらに、その中から二つを選び、適切な題名をつけてみるという練習（制限時間10分）を行なう。与えたテーマ例は、次の10題。——①私の生き方、②友人、③デフレ、④喫煙や飲酒について、⑤近頃不満に思うこと、⑥大学生活、⑦アルバイト、⑧インターネット、⑨携帯電話、⑩近所に開店したレストラン。

### 《第4講》作品紹介①／主題を支える材料を集める／描写文を書く

第4講の前半は、第2講課題「自己PR文」の優秀作の紹介である。エピソードが具体的に魅力的な作品や、文章構成のしっかりしている作品を中心に、8編紹介した。その題を以下に挙げておこう。——「誉められることの効力」「ピアノと私の成長」「私と採点アルバイト」「やっぱり商売人」「文通はパーフェクト」「笑いジワ」「部活動で学んだこと」「わかること、教えること」——こうして並べてみるだけでも、主題意識の明確な文章であると推察できるであろう。受講生にも、題や見出しが文章の方向性を決定づけることを確かめさせた。

後半は、「文章作成の基本」第2回である。取材と構成について、注意点を確認した後、「季節の変化を三つの具体的事実でとらえて描きなさい」という課題を与えた。その際、書き出しは「五月入り、（ ）もすっかり初夏の季節となった」に指定した。こうす

ることによって、トピックセンテンスを冒頭におく構成が体得でき、三つの材料を具体的に描写する練習に集中できるのである。

#### 《第5項》作品紹介②／構成を考える

第5講の前半は、第4講課題「季節の変化をとらえる描写文」の優秀作の紹介である。「周囲の風景」「私の部屋」「教室」「電車」「我が家の庭」「岡山」など、身近なものに題材を見つけ、五官を活用して述べているものや、具体的名称を挙げているもの、静と動を対比させて描いているものなど、表現上の工夫の見られるものを6編紹介した。

後半は、「文章作成の基本」第3回である。草稿を書く際の注意点を確かめた後、「説明」「描写」「叙事」「議論」の四つの叙述法について解説した。

練習課題は、議論文である。「真面目は欠点であるというが、そんなことはない」という書き出し文に引き続き、200～300字程度で自分の意見を書く。こうすれば、冒頭に結論を述べ、具体的事実で論証する文章を体得できるだけでなく、「確かに……、しかし～」という構文を用いた意見文を書く練習にもなる。

#### 《第6講》段落分けと推敲

エントリーシートでは、「段落分けに困る」という受講生が多かったので、第6講では、「文章作成の基本」第4回の学習として、テキストに示された練習問題を活用し、段落分けをする原則について学んだ。

また、主語・述語の対応や修飾語の位置など、わかりやすい文章を書くための原則について学んだ。これで、「文章作成の基本」をひととおり終えたことになる。

#### 《第7講》作品紹介③／修飾語の位置と読点／レポートの書き方

第5講課題「真面目は長所だ」の優秀作を紹介した後、第6講の補足として、「修飾語の位置と読点」を取り上げた。教材は、本多勝一『日本語の作文技術』（朝日文庫）及び木下是雄『レポートの組み立て方』（ちくま学芸文庫）から例題を引用して作成した。

講義の後半は、「レポートの書き方」について、テキストを用いて概説した。第7講から、テキストの「Ⅲ ささまざまな文章を作成する」に入っているが、5月末が近づいていたので、「レポートの書き方」を優先した。レポート作成に苦しんでいるという1年生からの訴えに応えることを重んじ、テキストの掲載順序にこだわらないことにしたのである。

#### 《第8講・第9講》手紙を書く

第8講と第9講とでセットになった単元である。第8講で、課題を提示し、表現目標を自覚させた上で、手紙の書き方（形式や留意点等）について、テキスト「Ⅳ 資料」を活用して確認する。第9講では、実際に記述する時間を確保して、90分で書き上げさせる。（第9講は、教育実習校の訪問時期と重なった。実習期間3週間の中に約20校を訪問するには、幾つかの講義を自習にせざるを得ないので、その自習課題の一つとして用いた。）

課題は、「恋文に対するお断りの返事」である。芥川龍之介の恋文「文ちゃん」を自分が受け取ったものと仮定して、芥川龍之介宛にお断りの返事を書いてみるのである。

もともと、この課題の場合、公的な実用文の練習にはならない。情を重んじた私信であ

ることを常に念頭においておく必要がある。相手が文豪であるから、敬語を用いることや正式な手紙の書き方に従う必要性を実感させることはできるが、定型を活用した手紙の練習にはならないのである。

にもかかわらず、この課題設定を採用したのは、まず楽しんで書くこと、手紙の魅力を再発見させることに重点をおいたからである。公的な実用文の学習は単なる形式の習得に流れやすく、授業を活性化させるのが難しい。そこで、公的な実用文の学習は、期末試験に組み込むこととした。(なお、この実践に関する考察は、既に拙著『発見を導く表現指導』(右文書院、1998.5)で発表済みである。参照いただければ幸いである。)

#### 《第10講》説明文を書く

虚構の作文が続いたので、第10講からは説明的・論理的文章に重点を移す。(実習校訪問のため、提出作品を読みきれなかった。やむをえず、第9講課題の優秀作紹介は、次時に繰り延べる。)

第10講は、「正確でわかりやすい説明文を書く」ことが目標である。テキストに沿って、説明文を書くための基本を理解した後、演習問題に取り組む。課題は次の三つ。——①「折り鶴」(日本語の達者な外国人に)、②「ポートボール」(赴任先の小学校で)、③「携帯電話」(一人暮らしのご老人に)。——この中から一つを選び、400字以内で説明するのである。

この課題を与えるにあたっては、相手を明確にし、文体の選択に気を配らせるように配慮したが、主題の選択については、受講生に任せた。しかも、字数が少なかったので、大変書きづらかったようである。指導者としては、定義した上で、その用法(折り方、遊び方、使い方)等に言及させたかったが、ねらいを達成した受講生は少なかった。モデル提示を怠ったのも、戸惑わせた一因である。

#### 《第11講》作品紹介④／文章交流会B／報道文を書く

第11講の前半は、第9講課題「恋文への返信」から、個性的な作品を8編紹介した。高村光太郎と智恵子になぞらえてみたものや、借財を抱えての父の自殺を理由に挙げたものなど、奇抜なものもあったが、例年以上に魅力的な返信が多く、感心させられた。

後半は、報道文(ニュース記事)を書く学習である。テキストに紹介されている「同窓会報の記事」を書かせることなどは避け、ニュースソースを物語から取ってきて、報道文にリライトするという方法を試みた。教材は、木村裕一『あらしの夜に』(講談社、1994)である。(記述は自宅学習とし、次時まで提出するように求めた。)

なお、この授業の詳細と表現内容の実際は、中国四国教育学会『教育学研究紀要』(CD-ROM版)第49巻(2004年3月発行予定)に発表した。参照いただければ幸いである。

#### 《第12講》エッセイを書く

前半は、第10講課題「説明文を書く」の相互批評会を行なった。同じ課題を扱った受講生同士で読みあい、コメントを書きあうのである。観点は、第3講同様、二つである。——観点①感心したところ(焦点の絞り方、述べる順序、用語など)、②説明のわかりに

くかったところ。

後半は、エッセイを書く学習に入る。森毅のエッセイ「雑木林の小道」(『ひとりで渡ればあぶくない』筑摩書房、1989)の着想と構成を分析し、この文章をまねて、「私の流儀」というテーマでエッセイを書くのである。(この授業のアイデアは、澤田英史「枠組み指定作文の試み」(『月刊国語教育』1995年12月号、東京法令出版)に学んだ。)

このエッセイの特徴は、「計画を立てるのが苦手だ」という日常の困難点から書き出し、それを克服する方法を「自分の流儀」として擬態語化して示しているところにある。しかも、予想される反論を紹介して再反論を試みるという「主張と容認」の構成法を用いており、議論文の練習としても活用できるものである。

そこで、次のような「枠組み表現」を用いるように指示し、自分の人生の流儀を擬態語化して表現するように求めた。

①～するというのが苦手だ。②それで～するようにしている。③それで、〈擬態語〉というのが私の流儀である。④これは、～ように見られやすい。⑤しかし、ちょっと言わせてもらえば、……。⑥もっとも、～ということは否定しない。⑦それでも、……。 (⑥以下は使わなくともよい。)

字数は600～800字程度とした。だが、この字数はかなり窮屈だったようだ。後期に開講された「文学Ⅶ」の講義において、京都ノートルダム女子大学(植山俊宏氏指導)との交換文集を作成した際に、同じテーマで1200字程度に字数を増加して書き直させたところ、言葉足らずのところがなくなり、いずれも説得力のある文章に仕上がった。時間において書き直したのが最大の要因だと思われるが、字数制限の在り方についても示唆の得られるものであった。

### 《第13講》効果的な見出しについて考える

第11講の課題「報道文—あらしの夜に」の優秀作を紹介する前に、全員の「見出し一覧」を提示して、比較検討させた。「①心惹かれる見出しはどれか。」「②記事の内容がよく分かるものはどれか。」「③改善の必要があると感じたものはどれか。」この三つの観点から、気がついたことをメモした上で、話し合うのである。

①について考えることは、キャッチコピーのレトリックについて学ぶことに他ならない。②について考えることは、5W1Hの要素を再確認させることにつながるものである。

こうして、本文への期待を持たせた上で、用意していた優秀作8編を紹介した。8編中6編が①に該当する作品として選ばれていたものと一致した。見出しを考えさせることが、主題意識を明確にさせる証左であろう。

### 《第14講》文章表現学習のまとめ

前半は、通常のように、第12講課題「私の流儀」の返却と優秀作の紹介である。「昨日も今日も明日もギリギリ」「私流のサバサバ」「バババッ」「そそくさ」「ガツガツ」など、いずれの文章も、日常の失敗談を取り上げながら、その失敗を糧にして開き直ってしまうたくましさを感じられて、魅力的なものに仕上がっていた。

その後、学習記録「私の本」の「まえがき・目次」「あとがき・奥付」用紙を配布し、提出日を確認したり、期末試験の内容を予告したりした。

後半は、「敬語や慣用句の点検と解説」である。敬語は、エントリー用紙にも困難事項として記載されていたことであり、機会を見つけて整理しておきたいことだったからである。「日本語力測定試験」（日本語学研究所、明治書院）の問題等を参照しながら練習問題を作成し、不適切な表現を探させることによって、敬語や慣用句のチェックを行なった。

#### 《第15講》期末試験

期末試験の内容は、言語事項に関するものを中心に構成した。①文の批正（15題）、②用語の説明（「主張と容認の構成」「帰納法と演繹法」）、③学級懇談会案内状の作成、などである。

期末試験では知識を問うものを多く出題し、平生の提出物による文章表現力の評価や、出席状況等による学習態度や学習意欲の評価とあわせて、総合的に評価するようにした。

### 4. 学生による授業評価

第15講の試験終了後に、「授業評価アンケート」（無記名）を実施した。この授業で実際に取り組んだ課題について、「課題に興味・関心が持てたか（興味・関心）」「課題が難しいと感じたか（難度）」「文章表現力の向上に役立ったか（効果）」の三つの観点から5段階評価するとともに、講義内容や方法に関する感想や意見を自由に書くように求めたものである。

#### (1) 5段階評価による評価

5段階評価による受講生（57名）の回答は、右の表のとおりである。

「興味・関心」が最も高かったのは、「報道文を書く」、続いて「手紙を書く」「エッセイを書く」である。虚構の場を活用して、堅苦しくならないように配慮した課題への評価が高さが注目される。また、基本の学習よりも、応用編にあたる文種ごとの学習に、高い関心を示していることに注目しておく必要があるだろう。

「難度」においても、基本学習は平均値以下のものが多く、応用学習ではいずれも4.0以上となっている。つまり、おおむね易から難へと配列されていると判断できるのである。もっとも、最後のキャッチコピーがきわめて易しいものとして挙げられている点に言及しておく必要があるだろう。これは報道文に付随した学習であって、独立した課題と同一に見ることはできない。学習作業量も少なく、困難度という点では当然の結果だと言える。

「効果」では、「敬語・慣用表現」「修飾語の位置と読点」のような基礎知識に関する

授業評価アンケート結果

	課題名	関心	難度	効果
1	エントリーシートを書く	3.1	2.2	2.9
2	自己PR文を書く	4.0	3.5	4.0
3	主題文を書く	3.3	3.3	3.4
4	描写文を書く	3.7	3.9	3.6
5	議論文を書く	3.5	3.8	3.7
6	修飾語の位置と読点	3.7	3.9	4.2
7	手紙を書く	4.4	4.1	4.0
8	説明文を書く	3.6	4.2	4.0
9	報道文を書く	4.5	4.1	4.1
10	エッセイを書く	4.2	4.0	4.3
11	敬語・慣用表現	4.1	4.1	4.5
12	見出しとキャッチコピー	3.8	3.4	3.5
	平均値	3.8	3.8	3.9

練習問題の評価が高い。曖昧であった知識が明確になった喜びを物語っているのであろう。文章表現課題では、「エッセイを書く」の評価が高い。取材方法や構成方法がわかりやすく、自分の考えをまとめることができ、人に伝わる喜びを味わえたからであろう。

## (2) 自由記述による評価

感想や意見の自由記述欄には、次のようなコメントが記されていた。

- ①文章を書くのは苦手だけど、昔よりはスラスラ書けるようになった。手紙や報道文を書くことは楽しかったので、取り組みやすかった。
- ②キャッチコピーは面白かったです。課題をほぼ毎回やることは大変でしたけれど、人の作品を読んだときに「ああ、こういう書き方があるんだ」と納得したり、書き方の発見をしたりすることは、自分のためになっていると思いました。
- ③題材が面白いものが多く、あまり嫌だと思わず、工夫を凝らすことに楽しみを感じながら取り組めたのでよかった。添削などこまめにしていただいたので、大変参考になった。他の人が書いた作品が読めたので参考になった。
- ④大学の講義でこのように自分のことを文章にしたり、想像力を使うというようなものは受けたことがなかったので、とても楽しかったです。宿題が毎回出るのは大変でした。「私の本」は大切にしたいと思います。
- ⑤とても面白い授業だった。今まで受けた授業の中でいちばん国語らしい授業だったと思う。本当に毎時間楽しみだった。自分の書いたものに対して誰かから評価をもらうというのは文を書くことが好きになるよい方法だと思う。
- ⑥毎回の講義は大変でしたが、講義内容は面白く、充実した90分でした。優秀作品を読むのが毎回楽しみでした。文章表現力が向上したかどうかは分かりませんが、文章を書くときに、ふと、この講義の内容を思い出します。

このように「書くことが楽しくなった」「面白かった」と記した者が40名（受講生の70%）、「添削や文章交流会が参考になった」と明記した者が19名（受講生の33%）、この他、ほとんどの受講生が「達成感がある」「役に立つ」等と肯定的な感想を記していた。

もっとも、「詰め込みすぎで、一つひとつのことが印象に残りにくい」「講義のスピードが速い」という批判や、「課題がとても変わっていたので戸惑った」という感想、「もっとたくさんコメント書いてほしい」という要望などもないわけではない。授業内容の精選と評価の在り方については、さらに改善策を考えていかねばならない。

## 5. 1996年度と2003年度との比較

このように授業内容を振り返ってみると、この二つの年度で取り上げた文種にさほど大きな違いはないことに気付かれるであろう。手紙、エッセイ、意見文、説明文など、基本的な構成はほぼ同じである。

また、課題の与え方においても、虚構の設定を活用したり、枠組み作文を用いたりしている点に、変わりはない。

評価や処理の方法も、さほど大きくは変わらない。毎時間の冒頭に、各自の作品にひと言ずつコメントを添えて返却すること、優秀作を紹介すること、文章交流会で相互に批評すること、この三つの方法を併用していった点は全く同じである。さらに、学習記録「私の本」の作成を求めた点も同じである。

違いがあるとすれば、「書いては読む、読んで書く」という回数をできるだけ多くしたという点である。以前は、記述時間を確保して、できるだけ授業中に書き上げさせるようにしていたが、2003年度は、記述時間は15分程度に留めることにした。短時間に自分の意見や考えをメモしておき、その着想を温めながら、自宅でじっくり書き上げさせるようにしたのである。そうして新たに確保できた時間は、話し合いや文章交流会に活用した。言い換えれば、自分ひとりではできることは自宅で行ない、共同でなければ行なえないことを教室で行なうという方針を、できるだけ貫くようにしたのである。これは、受講生の努力と協力なくしては実現できないことである。幸い、意欲的な学生が多かったことと、授業の中間日を課題提出日とすることによって、自宅学習課題を忘れてきたために授業に参加できない学生はいなくなり、欠席する者もほとんどいない状態となった。

また、もう一つの違いは、1996年度に残された課題であった系統性に道筋が見えてきたことである。単調になりがちな基本学習段階で、短作文を多く取り入れ、処理を速くしたこと。後半の文種別表現段階で、受講生のニーズに沿って、課題を自在に入れ替えたこと。さらに、課題の難易度に見通しがつけられるようになり、易から難へと配置できるようになったこと。これらが2003年度の最大の収穫である。特に、エッセイを最終段階におくという発想は、速水博司『大学生のための文章表現入門』（前掲）や木原茂『文章表現十二章』（三省堂、1983）の構成に学ぶところが大きい。

## 6. おわりに

この拙稿は、大阪教育大学国語教育研究会177回例会（2003年10月）の発表内容から、授業における表現課題の部分を抽出し、新たに書き直したものである。

本研究会第88回例会（1996年5月）における発表（「大学における『国語表現法』の授業展開—1995年度の場合—」）や、拙稿の冒頭に取り上げた1996年度の実践を思い起こしてみても、その内容はさほど変化していないように思える。だが、課題の取り扱い方や提出作品の処理の仕方において、常に先を見通して実践できるようになってきたことは間違いない。また、授業に対する心意気はますます清新なものとなっている。それはひとえに、この研究会で学ばせていただいているおかげであろう。拙い発表に対する、野地潤家先生、中西一弘先生、小田迪夫先生からの温かいご助言や、研究会参加者からの鋭い質問が、私に新しい発見をもたらしてくれたのである。一つの発表に対し、これほど丁寧に論議を重ねてくれる研究会は、日本中を探してもそう多くはあるまい。今回の報告も、その学恩あつてのものである。厚く感謝申し上げたい。